

生涯発達心理学を基盤に

自身のキャリアを見つめ、

現場と理論、

両方の視野を養ってほしい

キャリアデザイン学研究所
キャリアデザイン学専攻

田澤 実 准教授



従来の発達心理学は、子どもから大人までの成長する過程を中心に扱ってきました。しかし、近年では、生涯発達心理学という呼び方が一般的になってきました。両者の違いの一つは、成人期以降の発達や成長への注目の程度です。生涯発達心理学は、キャリア理論とも親和性が高いと思います。たとえば、学校から社会への移行はどちらにも共通するテーマです。大学生を対象にした研究からは、自己効力の高い学生、よく学び、よく遊ぶ学生、在学中に社会的なネットワークを作った学生などがキャリアに良い影響を与えることなどが明らかになっています。

このような研究に関心が集まるのは、厚生労働省がキャリアコンサルティングの普及に力を入れていることも関係しているかもしれません。キャリアデザイン研究科は社会人院生が多く在籍しており、実務を経験した上で理論を学びたいという方が多いです。自身の今後を考える上でも重要な学問と言えるでしょう。

キャリアデザイン研究科は、社会人院生の在籍が約9割を占めていることが特長です。その背景の一つに、実務と学術的な面が密接に関わっていることがあげられ

ます。現場で生じた疑問を解消するために学びに来る方や、現場にあるデータをどのように活用したら良いのか、有効活用する方法を学習しに来る方などがいることは、その具体例だと思います。そして、現場の人間が専門性を磨くことで、職場に置ける潜在的な課題の発見を目指すなど、研究者が研究だけを行う分野ではないことも特長です。本学で学んだことを、現場に活かし、職場をより良くする方法を考えるための材料を見つけ出すといった幅広い視野を養ってほしいと考えています。

市ヶ谷という場所のメリットは、仕事の後でも通学しやすい方が多いことだと思います。法政大学大学院では、多種多様な経験を有する方が集まります。その中で、キャリアデザインを学ぶことは有用なことです。お互いに刺激しあい切磋琢磨できる環境で、直接的な学びだけでなく、先輩や後輩といったつながりを持ち、多くのコミュニティに関わってください。自分と同じ業界の先輩から話を何うだけでも新しい気づきにつながるでしょう。多様な人材が集まるネットワークの中で学習できることは深い学びにつながります。

LABORATORY INFORMATION

私の研究室では、目的意識を強く持ってもらうように指導しています。学会発表や研究論文といった学術的なアウトプットを目指すのか、自身の働いている環境に分かりやすい形でフィードバックすることを目指すのかなどです。論文を書くことだけではなく、何のために書くのかといったビジョンを持つことが重要です。本人が目指すことをお互いに共有し、適切な指導方針を決めています。主体性のある取り組みを意識してもらい、自ら考え、選択できる能力を養います。



PROFILE

神奈川県生まれ。2007年中央大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程単位取得退学。博士(心理学)。2007年4月より法政大学キャリアデザイン学部助教に就任。2016年度は、厚生労働省 キャリアコンサルタント更新講習(知識講習)作業部会委員など各種委員を担当。

2011年3月の福島第一原発事故をきっかけに、放射性セシウムの回収材としてゼオライトが注目され始めました。“ゼオライト”とは、多孔質含水アルミノケイ酸塩で、イオンの交換性、吸着性を有した素材です。火山大国である日本には、天然に多産する環境が整っていることもあり、このような天然素材を利用することで、低コストで放射性セシウムを回収し、かつ長期安定化を目指すことのできる環境に優しい材料を開発することができます。近年の社会環境において、人類の持続可能性を高めるためには「持続可能な循環型社会経済システム」へ変革していくことが必要だと考えています。汚染された水や土壌の回復だけでなく、より少ない環境負荷を目指す新しい技術開発が重要であり、人々の関心も高い研究テーマです。社会的な要請が非常に強く、私たちの暮らしに密接に関わっていることからやりがいのある分野といえるでしょう。

しかし、環境問題にはまだ課題が多く、その一つに研究室での実験内容と日々変化する現場の自然環境との齟齬があります。これらはフィールドワークを繰り返して行い、データを蓄積し、一つひとつの

事象を丁寧に把握していくことで解決していけると考えています。また、フィールドワークは、学生の意識改革にも期待できます。学生が自分の目で現場を捉えることや、手で触り材料収集を行うことで、意識的な変化が起こり、研究をやらされているのではなく、使命感を持って自分から率先して行うようになります。体験することが学生の成長につながっているのだと実感しています。

大学院は、学部で得た専門的な知識を利用して、自ら考えて行動し、研究を遂行する場であり、研究者や技術者への第一歩目ともいえます。大切なのは、多くの研究に対する討論を行い、発表する場を設け、研究しやすい環境をつくれるよう多くのプロジェクトや共同研究等を積極的に推進していくことです。そうすることで意欲的な行動力と外部からの刺激を研究に活かす柔軟さが養われます。「自分で考えて行動する」ことは、企業に入ったとしても重要です。さまざまなことに興味を持って行動し、学部では経験できない多くの専門知識を習得してください。そうして得られる「生きた情報」を糧に社会に寄与する人材に育ってくれることを期待しています。

LABORATORY INFORMATION

大学院生は学部生と異なり、より良い研究者や技術者になるための研究に対する目的意識を持たなければなりません。研究に対して真摯な姿勢で挑み、自身のテーマを独立して進める能力を持つことが重要なのです。研究テーマについて、重要性・新規性・社会的インパクト・研究分野の中での位置付けを把握できるよう丁寧に指導し、企業の方々との打ち合わせなどにも積極的に参加させ、外部からの刺激を自身の研究に取り入れる柔軟さを磨かせます。



PROFILE

東京都生まれ。2005年法政大学大学院工学研究科物質化学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。2005年4月より金沢工業大学講師に就任。同大学准教授を経て、2017年4月より法政大学生命科学部准教授に就任。

自分で考えて行動する

研究に対する真摯な姿勢が重要です。

自分の研究を社会に寄与し

環境負荷の軽減を目指す。

理工学研究科
応用化学専攻

渡邊 雄二郎 准教授

